平成２２年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

救急蘇生ワークショップ

～香川県の救命率向上を目指して

香川大学 ACLS 勉強会代表　　鈴　木　健　太　（医学部医学科５年）

１．目的と概要

心停止時の救急蘇生のトレーニングコースである「BLS[*1]」および「ICLS[*2]」を、学生が自主性をもって広める。特に「BLS」に関しては一般市民を対象とした講習会を行い、いざというときに救命処置を行える一般市民を一人でも多くし、以って香川県の救命率向上に貢献する。

BLS[*1]　; Basic Life Support(一次救命処置)の略称。
特別な道具や技術を必要としない一般市民が実施できる救命処置。

ICLS[*2]　; Immidiate Cardiac Life Supportの略称。
ALS(Advanced Life Support;二次救命処置)の一部。
医療従事者が行う高度救命処置。

２．実施期間（実施日）

今年度の活動内容は以下のとおりです。「第〇回」と付してあるのは、2 時間の講習会を実施できたものであり、「第〇回」と付していないものは講習時間 1 時間程度の短縮版講習会、ないしは簡単な救急蘇生の紹介を行ったことを示します。

【一般市民向け講習会】

2010 年 9 月 4 日　香川大学サークルリーダー研修会にて救急蘇生法を講習
（香川大学学生生活支援グループからの依頼により）

2010 年 10 月 9 日　香川大学医学部祭にて AED の展示と救急蘇生法を講習

2010 年 11 月 14 日　糖尿病プロジェクトイベントにて救急蘇生の紹介
（当該イベントを主催する事務局より依頼）

2010 年 11 月 30 日　第 12 回一般市民向け BLS 講習会
「さぬき警察署」にて開催

【医学部生向け講習会】

2010 年 7 月 18 日　第 10 回医学部生向け ICLS 講習会を開催

2011 年 3 月 6 日　第 11 回医学部生向け ICLS 講習会を開催予定

３．成果の内容及びその分析・評価等

今年度は 7 月に開催した医学部生向け ICLS 講習会を皮切りに、計 4 回の一般市民向け

BLS 講習会を開催することができました。昨年まで中心となり活動してきたインストラクターの大学卒業に伴い、インストラクターの数に若干の不安を抱えながらの開催となりましたが、講習会の質は昨年までと同様、受講される一般市民の方に満足していただけるような水準を保てたのではないかと感じております。以下に、今年度開催した BLS 講習会のいくつかについて、報告させていただきます。

9 月 4 日には、香川大学サークルリーダー研修会の参加者を対象に BLS 講習会を開催いたしました。参加者の数が 200 名弱という大人数ということもあり、講習会自体を 2 度に分けたり実際に実習を行っていただく方を絞ったりとアレンジしましたが、やはり無理があったように思います。1 人のインストラクターが 1 回に教える相手が 6 人を超えるとどうしてもインストラクターの目が届かない受講生が生まれてしまい、私語や実習の妨げの原因となりえます。やはり 1 回の講習会で対応できる受講人数は 10 名～20 名であると強く感じた講習会でした。

【胸骨圧迫を行う受講生と
横について指導するインストラクター】

10 月 9、10 日には香川大学医学部祭で AED の展示や BLS 講習会を行いました。医学部祭の通りすがりに AED を見ていこうという方はもちろん、中には救急蘇生講習会目的の来場者の方もいらっしゃり、改めて一般市民がこういった講習会を必要としていることを実感いたしました。また、11 月 14 日には糖尿病プロジェクトイベントの一環として、ゆめタウン高松の買い物客を対象に AED の普及を呼びかけました。AED の販売会社である「フクダ電子」様と共同しての活動だったため、学生自身も AED についての知識をアップデートするよい機会になりました。

【AED の使い方を説明するインストラクター(右)】

これら 3 回の活動の中で、受講者の方々の「救急蘇生は知りたいけど、どこにお願いしたらよいか分からない」というご意見を少なからず耳にいたしました。「ならば、学生が積極的に地域へ出て行こう！！」と思い立ち、開催したのが 11 月 30 日のさぬき警察署職員を対象とした講習会です。職員 20 名に対し学生インストラクター8 名で、人形 4 体を使用して開催いたしました。警察官の方は研修等で救急蘇生をご存知だと思っておりましたが、それはごく近年の話で、ほとんどの警察官の方はそのような研修は受け

ていらっしゃらないとのお話を実習中に伺い、大変驚くとともに講習会開催の必要性を実感いたしました。

【胸骨圧迫実習と AED 実習をあわせた、
実際の現場を想定した実習】

以上、簡単ではありますが、今年度開催した講習会の大まかな概要です。講習会を通して感じたことは、一般の方々は救急蘇生（特に AED）への関心が非常に高く、そうした講習会を必要としていることです。多くの人が集まるような公共の場への AED の設置が進み、現在ではより一般市民が使いやすいように改良された AED も設置されるようになってきております。そうした流れの中で、「忘れかけた救急蘇生を思い出したい」「AED に一度は触れておきたい」ということで、講習会を受講する方が増えているように感じます。

学生が救急蘇生を教えるということの是非に関しては、講習会終了後のアンケートの回答が参考になると思います。「学生のインストラクターだと質問がしやすい」「少人数なので、実技が十分できる」といったものが多く、さらに学生の指導力・知識面についても「分かりやすかった」「質問にすぐ答えてくれた」などの肯定的な意見がほとんどでした。私達学生が開催している講習会が受講者の需要に十分こたえられるものになっているのではないかと、考えております。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

私達が開催している講習会は基本的に少人数を対象としているため、救急蘇生を実施できる一般市民の数が急に増えることはありません。しかしながら、一昨年の 3 月より草の根運動的に始まった一般市民向け BLS 講習会も、今年 2 月で 12 回を数えることになり、教えさせていただいた一般市民の数も 250 名を越えます。AED の紹介などの短縮版の講習会も含むとその数は 400 名をゆうに越え、少しずつではありますが、救急蘇生を香川県に広めることができていると考えております。さらに、今年度は私達の活動をテレビやラジオで数多く取り上げていただくことができ、「香川大学の学生が救急蘇生を広めている」ということを一般市民に知ってもらうきっかけになったと思います。実際、こうしたマスメディアや口コミを受けて、ご依頼をくださるケースが最近多く、つい先日も徳島文理大学さまからご依頼をいただいたところです。このように学生の活動に興味のある地域の方々や他大学と繋がっていくことは、今後地域で救急蘇生の輪を広めてい

【救急蘇生の必要性を知るオリエンテーション】

く際に重要となると思います。こういった活動に興味を持つ他大学の学生が増え、その学生たちが私たちとは別の場で救急蘇生を広めていく、そしてさらには香川県の救命率向上につながれば、これほど素晴らしいことはありません。

私達の活動目標は、救急蘇生ができる一般市民を増やすことです。そして、その先の到達目標は香川県の救命率向上です。しかしながら、救命率向上の成果は目に見える形で現れてくることが少なく、客観的な評価はなかなか難しいところがあります。それでも、助かるはずの命が失われることを防ぐことに繋がれば、まさにこの上ない地域貢献になるのではないでしょうか。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

一般市民向けの BLS 講習会を通して私達学生が受けた最大の影響は、教えることに対する責任感と自覚が以前にも増して強くなったことです。私たちが教えているのは救急蘇生です。街中で人が倒れて心停止状態に陥っていたとき、救急車の到着までの間、その場に偶然居合わせた人（バイスタンダー）が患者の命を救うためにできること、それが救急蘇生法（BLS）です。救急車が出動要請から現場に到着するまで、約 7.0 分（全国平均）かかります。この時間は決して早いものではありません。患者が搬送先の病院から「歩いて」家に帰られるかどうかは、むしろ救急車が到着するまでの BLS にかかっているといっても、過言ではありません。それゆえ、私達学生インストラクターが講習会で万が一間違った方法を教えてしまった場合、そして、受講者が偶然救急蘇生の必要な現場に遭遇し、その間違った方法を信じて救急蘇生を実施した場合、助かるはずだった一つの命が助からなくなってしまう可能性すらあるのです。「教えることは覚悟すること」。質の高い講習会を実施するため、「自分の知識や手技が本当に正しいのか」「本当にこれを一般の市民に教えてもよいのか」「最新の医療情報と矛盾したところはないか」などを自問自答し、常に知識や技術を向上していく自主性が必要とされます。こうした自主性は元々のインストラクターは勿論のこと、新たにメンバーに加わった新人インストラクターの中にもしっかりと根付いていることを感じております。

【第 10 回 ICLS 講習会　集合写真】

他に、専門外の人にわかりやすく分かりやすく内容を伝えることの難しさを感じました。講習会に参加してくださるのは一般市民であり、医学のことは基本的にほとんど知りません。こうした人には対しては言葉ひとつが分かりにくさを生む原因になります。そのため、専門用語をなるべく使用せずに、一般市民が理解できるように伝えるにはどのようにしたらよいかを考えさせられました。こうした「分かりやすく伝える」能力は、今後医療者として患者様の前に立ったときに必ず必要となるものです。そうした点でも、

この活動は非常に有益な活動であったと思います。

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

2004 年に AED の使用が一般市民に認められて 7 年、いまや AED は街のいたるところに散見されるようになりました。それが追い風となってか、AED はもはや一般常識となりつつあり、知らない人のほうが少数派になってきております。しかしながら、その実態は実際に使ったことも触ったこともない方がほとんどで、いざという時に冷静に対処できるのかどうか不安に感じています。そのため、その使用法についての講習会開催の要望が多く、実際に一般市民への活動を始めてみるとその声の大きさに驚かされます。こうした声に対して、医師や看護師、救命士の方々によって講習会が開催されてきていますが、これらの職種の方々は非常に多忙であるため、その負担は増加していく一方です。

このような状況に少しでも学生が協力できればという思いも、活動理由の一つです。学生の活動は非常に小回りが利きます。受講生が何十人も集まる講習会も必要ですが、10 人程度で開催できるような活動なら、一般市民の方も気軽に参加しやすいのではないでしょうか。10 人程度の少人数の方が受講者の実習時間を確保でき、実習を通して浮かんでくる受講者の質問にも丁寧に対応できるというのが私たちの統一見解です。少人数小規模制という利点を生かし、次年度はさらに BLS 講習会を展開していきたいと考えております。

一般の方々は、医学部生が BLS を行えるのは、当たり前のことだと思っています。そして、これから医学生に求められるのは BLS ができることのみならず BLS を指導できることであると思います。今後もこの活動を通して一般の方々に BLS を広め、そして BLS を指導できる医学生をもっと増やせたら、これほどうれしいことはありません。

７．実施メンバー

代表者	鈴木　健太（医学科 5 年）	
構成員	石田　ゆみ（医学科 6 年）	本波　理香（医学科 5 年）
	春日　武史（医学科 6 年）	森田　幸子（医学科 5 年）
	加藤　禎史（医学科 6 年）	岸本　優佳（医学科 4 年）
	鏑木　直人（医学科 6 年）	戸村　美紀（医学科 4 年）
	阪口　正洋（医学科 6 年）	上柴　このみ（医学科 3 年）
	池野　世新（医学科 5 年）	多々川　貴一（医学科 3 年）
	香西　友佳（医学科 5 年）	村田　智洋（医学科 3 年）
	鈴井　泉　（医学科 5 年）	山村　將　（医学科 1 年）
	成田　萌　（医学科 5 年）	大平　加代（善通寺看護学校 2 年）
	新居　広一郎（医学科 5 年）	原田　紗千子（善通寺看護学校 2 年）
	丸田　悠加（医学科 5 年）	藤原　義信（善通寺看護学校 2 年）